

牛肉

◆ 飼養動向

肉用牛の飼養頭数、前年比2.0%増

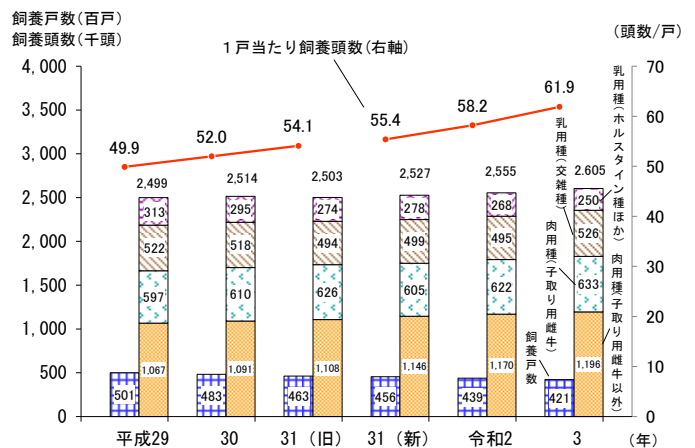
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いていることから、令和3年（2月1日現在、以下同じ。）は、4万2100戸（前年比4.1%減）と前年をやや下回った（図1）。

総飼養頭数は、3年は、260万5000頭（同2.0%増）と前年をわずかに上回った。肉用種と乳用種をそれぞれ見ると、肉用種は、平成28年以降、子取り用雌牛（繁殖雌牛）頭数が増加基調で推移していることから、令和3年は、182万9000頭（同2.1%増）と前年をわずかに上回った。乳用種^{（注）}のうち交雑種は、平成30年以降、乳用牛の減少に加え、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから減少傾向で推移したものの、乳用牛の頭数が回復傾向の中で、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことにより、令和3年は、52万5700頭（同6.1%増）と前年をかなりの程度上回った。乳用種のうちホルスタイン種ほかは、前述の理由により、乳牛去勢の減少が続いていることから、3年は、25万頭（同6.7%減）と前年をかなりの程度下回った。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、61.9頭（同6.4%増）と前年からかなりの程度増加し、経営規模の拡大が進展していることがうかがえる。

（注）肉用牛の「乳用種」とは、「畜産統計」では、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種のうち、肉用を目的に飼養している牛で、交雑種を含むと定義されている。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
 注1：各年2月1日現在。
 注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年、3年は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。
 注3：平成31年（新）のホルスタイン種ほかの飼養頭数は、機構にて当該年の乳用種飼養頭数から交雑種飼養頭数を減じて算出した。

◆ 生産

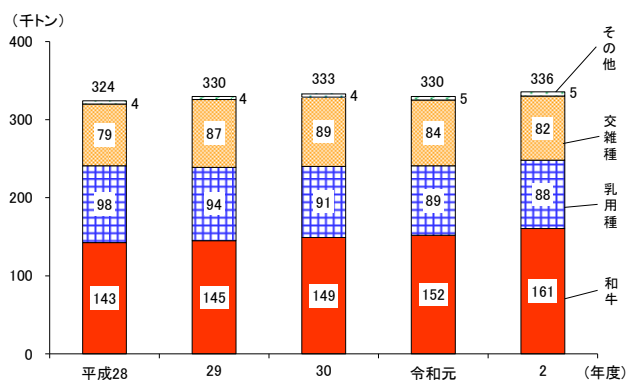
2年度の生産量、前年度比1.8%増

牛肉生産量は、近年、減少傾向で推移していたが、平成29年度以降の生産基盤強化対策の実施により繁殖基盤が拡大に転じたことなどにより、和牛を中心におおむね増加傾向で推移している。

令和3年度は、乳用種は8万7571トン（前年度比

1.6%減）、交雑種は8万2160トン（同2.4%減）と、ともに前年度をわずかに下回った一方で、和牛は16万564トン（同5.7%増）と前年度をやや上回った（図2）。この結果、全体では33万5556トン（同1.8%増）と前年度をわずかに上回った。

図2 牛肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース

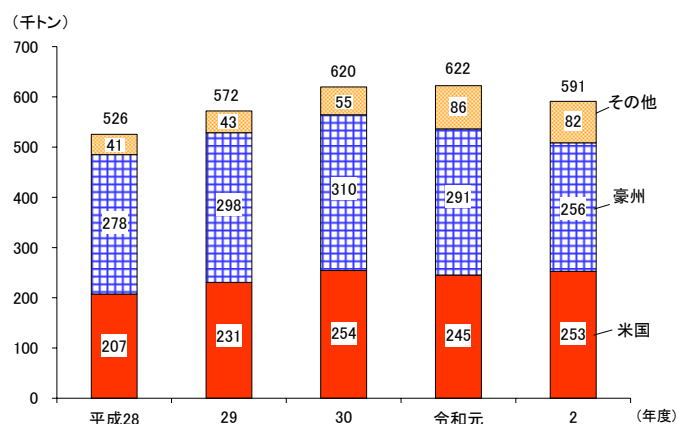
◆ 輸入

2年度の輸入量、前年度比5.0%減

牛肉輸入量は、近年、国内の景気回復などを背景に、焼き肉やハンバーガーなどの外食産業を中心に牛肉の需要が拡大していたことから、おおむね増加傾向で推移し、平成28年度から令和元年度までは、4年連続で増加したが、2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による海上輸送の遅れや、緊急事態宣言に基づく外出自粛要請による外食需要の減少などから、5万992トン（前年度比5.0%減）と前年度をやや下回った（図3）。

国別輸入量を見ると、豪州産については、干ばつ後の牛群再構築による生産量の減少に伴う現地価格の高騰などにより、25万5908トン（同12.0%減）と前年度をかなり大きく下回り、2年連続の減少となった。米国産については、25万2705トン（同3.0%増）と前年度をやや上回り、2年ぶりの増加となった。

図3 牛肉の輸入先別輸入量の推移

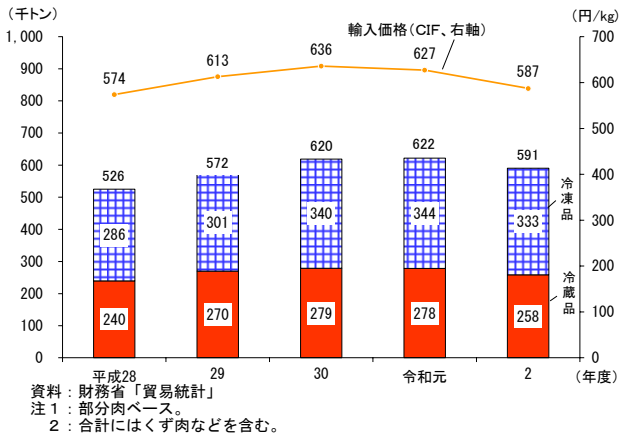


資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。くず肉などを含む。

輸入牛肉のうち、冷蔵品は主にテーブルミートとして量販店で販売されており、冷凍品は加工用や業務用として利用されている。近年、いずれも増加基調で推移していたが、2年度は、COVID-19の影響などにより、冷蔵品は25万8136トン（同7.2%減）とかなりの程度、冷凍品は33万2598トン（同3.2%減）とやや、いずれも前年度を下回った（図4）。

輸入価格（CIF）を見ると、1キログラム当たり587円（同6.4%安）と前年度をかなりの程度下回り、2年連続の低下となった。

図4 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格の推移



◆ 輸出

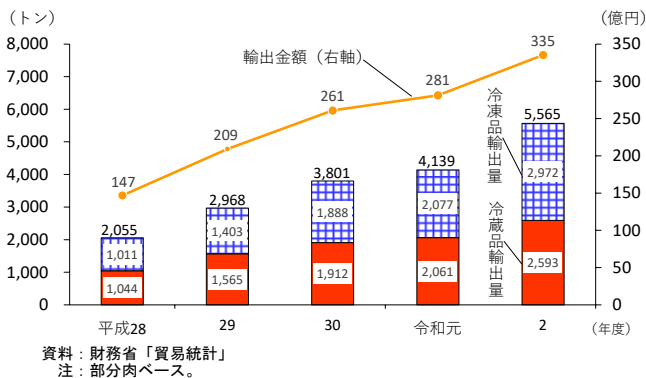
2年度の輸出量、7年連続で増加

牛肉輸出量は、販路の開拓や販売促進の効果などにより、7年連続で増加している。

令和2年度は、全世界的なCOVID-19の流行の中であっても、5565トン（前年度比34.5%増）、輸出金額は335億円（同19.2%増）と過去最高となった（図5）。

輸出量の内訳を見ると、冷蔵品は2593トン（前年度比25.8%増）、冷凍品は2972トン（同43.1%増）となった。冷蔵品と冷凍品の割合は、元年度は同程度であったが、2年度は冷凍品の割合が上回った。

図5 牛肉の輸出量および輸出金額の推移

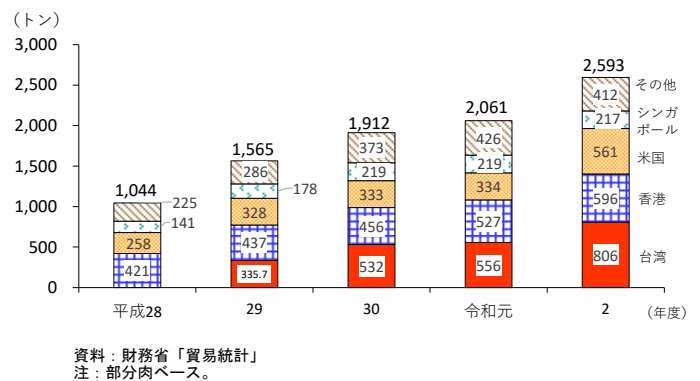


輸出先については、牛肉全体で見ると多くがアジアに輸出されているが、冷蔵品と冷凍品で輸出先は異なっている。日本からの牛肉の輸出が可能な国・地域は、アジアを中心に中東、欧州、北米・中南米、大洋州のさまざまな国や地域に広がっている。

冷蔵品の輸出先を見ると、2年度の最大の輸出先は台湾で806トン（シェア31.1%）、次いで香港が596トン（同23.0%）、米国が561トン（同21.6%）、シンガポールが217トン（同8.4%）となり、上位4カ国・地域で約8割を占めている（図6）。

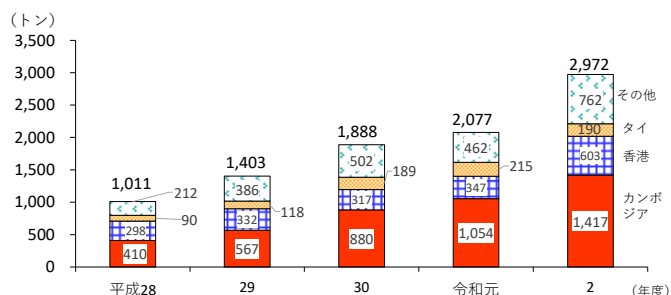
台湾向けは、日本で牛海綿状脳症（BSE）感染牛が確認されて以来停止されていた日本産牛肉の輸入が16年ぶりに解禁された平成29年度以降、輸出量を伸ばし、現在は冷蔵品の最大の輸出先となっている。

図6 牛肉の冷蔵品の輸出先別輸出量の推移



冷凍品の輸出先を見ると、令和2年度の最大の輸出先はカンボジアで1417トン（シェア47.7%）、次いで香港が603トン（同20.3%）、タイが190トン（同6.4%）となり、上位3カ国・地域で約7割を占めている（図7）。

図7 牛肉の冷凍品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆消費

2年度の推定出回り量は前年度比0.7%減、家計消費は同10.4%増

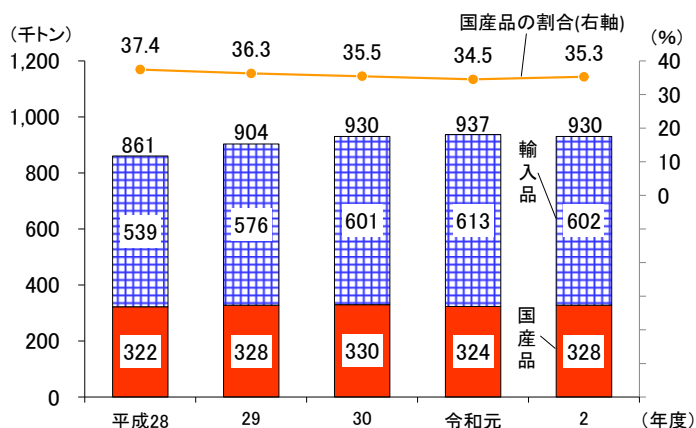
推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、近年の肉ブームなどを背景に好調に推移してきたが、令和2年度は、COVID-19の影響などにより、93万350トン（前年度比0.7%減）と前年度をわずかに下回り、5年ぶりに減少した（図8）。

出回り量の内訳を見ると、国産品については、COVID-19の影響による内食需要の増加などが反映され、32万8162トン（前年度比1.4%増）と前年度をわずかに上回った。輸入品については、COVID-19の影響による外食需要の減少などが反映され、60万2189トン（同1.8%減）と前年度をわずかに下回った。

なお、合計に占める国産品の割合は35.3%（同1.2ポイント増）と、6年ぶりに前年度を上回った。

図8 牛肉の推定出回り量の推移



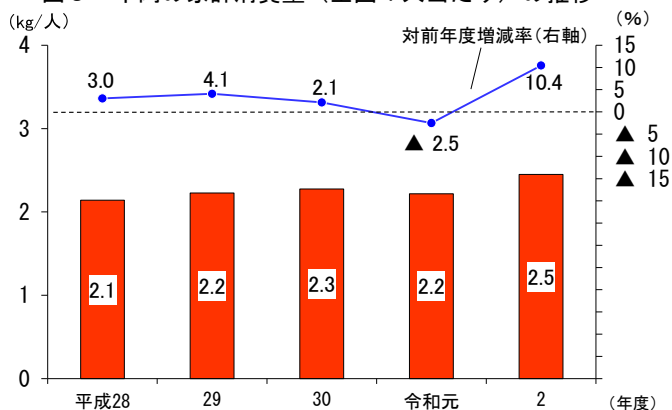
資料：農畜産業振興機構推計
注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉消費の約3割を占める家計消費は、近年の景気回復や好調な牛肉需要を背景におおむね増加傾向で推移してきた。

令和2年度は、COVID-19の影響による内食需要の増加が反映され、年間1人当たり2.5キログラム（前年度比10.4%増）と、前年度をかなりの程度上回り、2年ぶりの増加となった（図9）。

図9 牛肉の家計消費量（全国1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

◆在庫

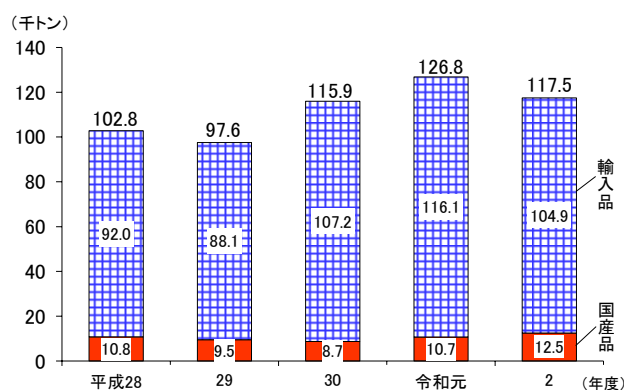
2年度の推定期末在庫、前年度比7.4%減

牛肉の推定期末在庫は、平成29年度までの輸入量が増加傾向で推移していたものの、輸入品の出回りが好調であったことなどから、在庫の取り崩しが進んだ。しかしながら、30年度は需要を上回る輸入が続いたこと、令和元年度はCOVID-19の影響による外食需要の減少などから、2年連続で前年度を上回った(図10)。

2年度は、全体では11万7475トン(前年度比7.4%減)と前年度をかなりの程度下回った。このうち、輸入品は、COVID-19の影響などによる輸入量の減少が反映され、10万4931トン(同9.6%減)と前年度をかなりの程度下回った一方で、国産品は、COVID-19の影響による外食需要の減少が反映され、1万2544トン(同17.1%増)と前年度

を大幅に上回った。

図10 牛肉の推定期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース

注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆枝肉卸売価格

2年度の牛枝肉卸売価格、和牛、交雑種、乳用種の全てで低下

和牛

和牛(東京・去勢A-5、A-3)の枝肉卸売価格は、平成23年以降、出荷頭数の減少により価格が上昇基調で推移した。28年以降、インバウンド需要や輸出需要を含む牛肉需要の高まりなどから、記録的な高値を維持したまま推移していたが、令和元年度は、価格が低下した。

2年度は、COVID-19の拡大の影響により、4月に価格の低落が見られ、A-5、A-3ともに10月まで前年同月を下回って推移したが、経済活動の再開や輸出の増加に伴い上昇を続け、11月以降、おおむね前年同月を上回って推移した。この結果、A-5が1キログラム当たり2502円(前年度比6.2%安)とかなりの程度、A-3が同1995円(同4.4%安)とやや、いずれも前年度を下回った(図11)。

交雑種

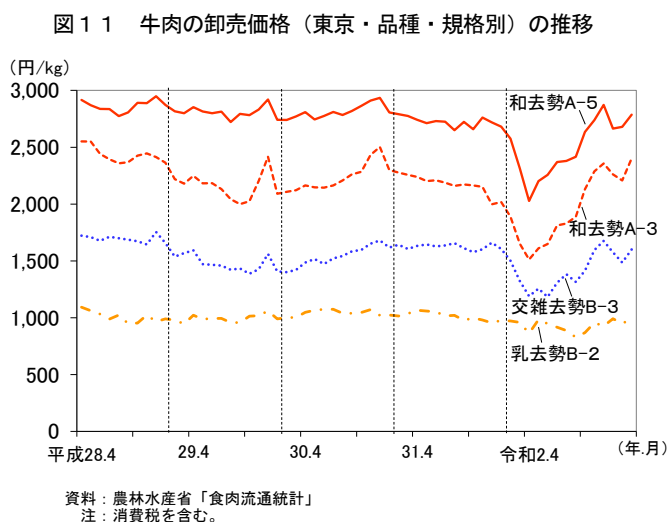
交雑種(東京・去勢B-3)の枝肉卸売価格は、近年、和牛の相場高を背景に、比較的手頃な価格帯で適度に脂肪交雑が入っている交雑種への引き合いが高まったことなどにより堅調に推移している。

令和2年度は、出荷頭数が減少したものの、COVID-19の拡大の影響により、4月以降、おおむね前年同月を下回って推移し、1キログラム当たり1415円(前年度比11.0%安)と前年度をかなり大きく下回った(図11)。

乳用種

乳用種(東京・去勢B-2)の枝肉卸売価格は、国産牛の中でも比較的安価で赤身が多い牛肉への底堅い需要がある一方で、出荷頭数が減少傾向となっていることから堅調に推移していたが、令和元年度は、価格が低下した。

2年度は、出荷頭数の減少が続いていたものの、COVID-19の拡大の影響により、1キログラム当たり925円（前年度比7.7%安）と前年度をかなりの程度下回った（図11）。

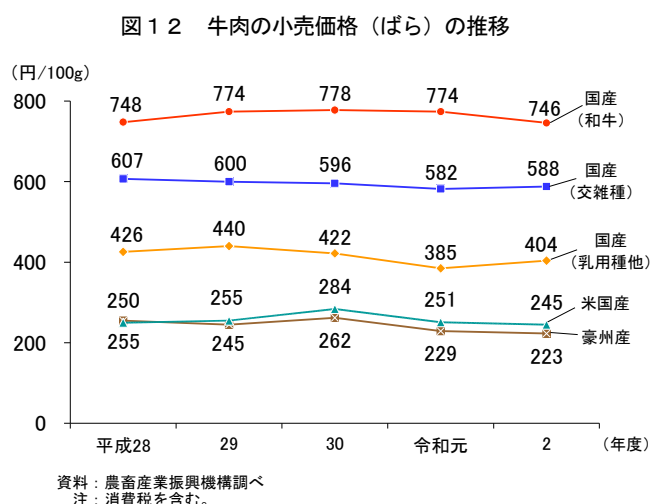


◆小売価格

2年度の小売価格、和牛のばらは1キログラム当たり746円

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるものの、おおむね横ばいで推移している。なお、国産品については、近年の枝肉の相場高を背景に、比較的高値が続いていたが、令和元年度は、国産品、米国産、豪州産のいずれも価格が低下した（図12）。

2年度の小売価格（ばら）は、和牛は1キログラム当たり746円（前年度比3.6%安）、国産牛（交雑種）は同588円（同1.0%高）、国産牛（乳用種他）は同404円（同4.9%高）、米国産は同245円（同2.4%安）、豪州産は同223円（同2.6%安）となった。



◆肉用子牛

2年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度比7.7%安

黒毛和種

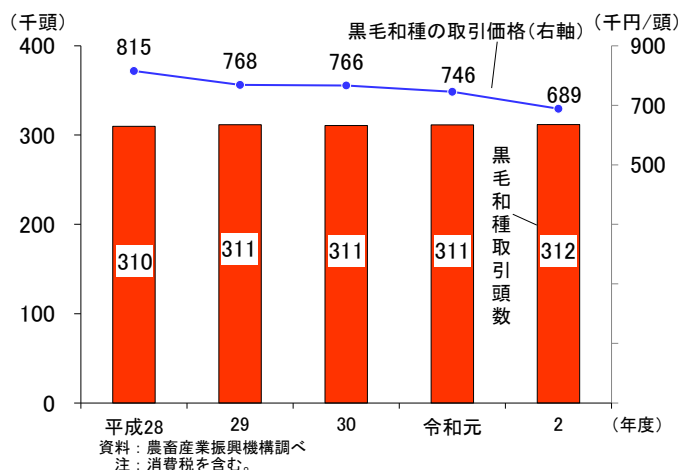
家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、減少傾向にあった繁殖雌牛が生産基盤強化対策の実施などにより平成28年度に増加に転じたことから子牛の取引頭数は回復傾向で推移し、近年は安定して推移している。令和2年度は、31万1822頭（前年度比0.1%増）と前年度並みとなった（図13）。

また、子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭

数の減少や枝肉の相場高などにより平成22年度以降に上昇が続いた後、28年度をピークに低下しているものの、引き続き高い水準で推移している。

令和2年度は、COVID-19の拡大の影響による和牛の枝肉卸売価格の低下に伴い、1頭当たり68万9000円（同7.7%安）と前年度をかなりの程度下回り、5年ぶりの60万円台となった。

図13 黒毛和種の取引頭数と市場取引価格の推移

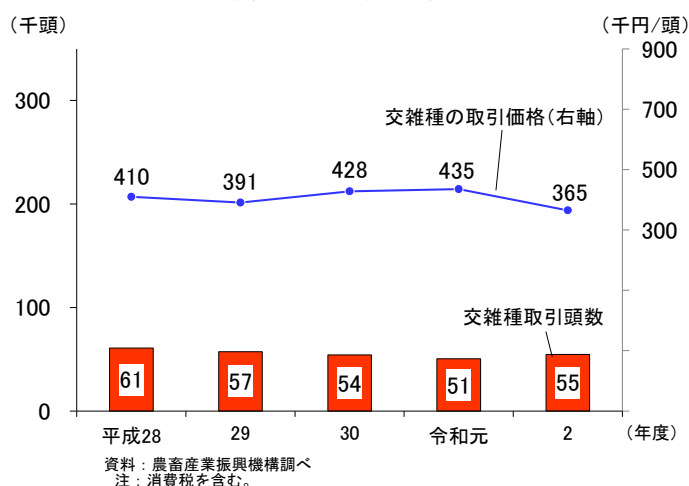


交雑種

家畜市場における交雑種の子牛取引頭数は、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから、平成28年後以降、前年度を下回って推移していたが、令和2年度は、乳用牛の頭数が回復傾向の中で、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことにより、5万4750頭（前年度比8.2%増）と前年度をかなりの程度上回り、5年ぶりの増加となった（図14）。

また、交雑種の子牛取引価格は、近年の枝肉の相場高や出荷頭数の減少を背景に、平成25年度以降、29年度を除いて前年度を上回って推移している。令和2年度は、COVID-19の拡大の影響による交雑種の枝肉卸売価格の低下に伴い、同36万5000円（前年度比16.1%安）と前年度を大幅に下回った。

図14 交雑種の取引頭数と市場取引価格の推移



ホルスタイン種

家畜市場におけるホルスタイン種の子牛取引頭数は、近年、おおむね1万2000頭台で推移している。令和2年度は、乳用牛への受精卵移植技術の活用による和子牛の生産拡大や前述の交雑種の頭数増加により、1万1152頭（同4.6%減）と前年度をやや下回った（図15）。

また、ホルスタイン種の子牛取引価格は、枝肉の相場高、取引頭数の減少などを背景に、平成27年度以降、上昇した水準で推移している。令和2年度は、同23万2000円（前年度比1.6%高）と前年度をわずかに上回った。

図15 ホルスタイン種の取引頭数と市場取引価格の推移

